

2016年(平成28年)4月13日

2015(平成27)年度 YMFS 調査研究事業  
「トップスポーツの現状と課題に関する調査研究報告書  
-ラグビーフットボールに関する社会的認知と観戦行動の基礎調査-」発行について

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(Yamaha Motor Foundation for Sports)では、平成27年度の調査研究事業で「トップスポーツの現状と課題に関する調査研究 -ラグビーフットボールに関する社会的認知と観戦行動の基礎調査-」に取り組み、このたび結果をまとめ、報告書を発行しました。本報告書は当財団ウェブサイトでも公開します。(http://www.ymfs.jp/project/culture/survey/007/)

当財団では、平成24年度から継続して「障害者スポーツの現状に関する調査研究」に取り組んでまいりましたが、平成27年度はこれと並行し、新たなテーマとして「トップスポーツの現状と課題」に着手しました。2015年はラグビーワールドカップ2015イングランド大会における日本代表チームの活躍で日本中が大いに盛り上がりましたが、今後、ラグビーワールドカップ2019日本大会開催を控えることから、ラグビーフットボールを本年度の調査対象競技として選択し、「ラグビーフットボールに関する社会的認知と観戦行動の基礎調査」を行いました。

### ■報告書の概要(全3章で構成)

【第1章】我が国のトップスポーツの現在地 日本のトップスポーツが学校運動部と企業スポーツを基盤としていた時代から、Jリーグにみられるような地域に根差したスポーツクラブへと変化していく流れを俯瞰し、時代変遷の中で高等学校ラグビーチーム加盟校数とラグビー部員登録人数の推移を手がかりに、調査研究の位置づけを論じています。

【第2章】ラグビーフットボールに関する認知度・関心度・観戦行動の基礎調査 平成27年度に実施した全国を対象とするインターネット調査と、ジャパンラグビートップリーグ第6節ヤマハ発動機ジュビロ対神戸製鋼コベルコスティーラーズ戦(静岡県磐田市/ヤマハスタジアム)の観戦者へのアンケート調査を併用する比較分析を試み、回答者のプロフィール、ラグビー観戦歴と今後の観戦意向、ラグビーに関する知識の認知度、観戦実態とトップチームへの要望などを報告しています。

【第3章】トップスポーツの未来像 今回のラグビーフットボールに関する調査研究に基づき、国内のトップスポーツの未来像を導き出し、トップスポーツに関する調査研究の方向性を論じています。



### ■調査研究委員会

委員長 海老原修(横浜国立大学 教育人間科学部 教授)

委員 浅見俊雄(東京大学・日本体育大学 名誉教授、公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団 理事)、

岡本純也(一橋大学大学院 商学研究科 准教授)、河西正博(びわこ成蹊スポーツ大学 スポーツ学部 助教)、

齊藤まゆみ(筑波大学 体育系 准教授)、澁谷茂樹(公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 主任研究員)、

高橋義雄(筑波大学 体育系 准教授)、中森邦男(公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 強化部 部長)、

日本パラリンピック委員会 事務局長)、藤田紀昭(同志社大学 スポーツ健康科学部 教授) (五十音順・平成28年3月31日現在)

この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください

(公財)ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS) 事務局 Tel. 0538-32-9827 Fax. 0538-32-1112 (担当:尾鍋)

〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500 番地 <http://www.ymfs.jp>

## 【ご参考】 調査研究結果の概要

### (1) ラグビー日本代表選手の認知率

図1はインターネット調査の結果を示している。ラグビーワールドカップ2015の主な日本代表選手10人の平均認知率(「知っている」と回答した者)は16.5%、「聞いたことがある」を合わせると23.4%。上位3選手は「五郎丸歩」81.4%、「リーチマイケル」31.6%、「田中中央朗」10.0%で、上位3選手間での認知率の差が大きい。また、10人の平均認知率が「田中中央朗」の認知率を上回り、上位2人の認知率が全体の平均値を押し上げている。過去の主な日本代表選手11人の平均認知率は10.0%で、「聞いたことがある」を合わせると15.9%。上位3人は「大八木淳史」24.7%、「松尾雄治」21.8%、「大畑大介」20.9%で、いずれも「田中中央朗」よりも高い値となった。

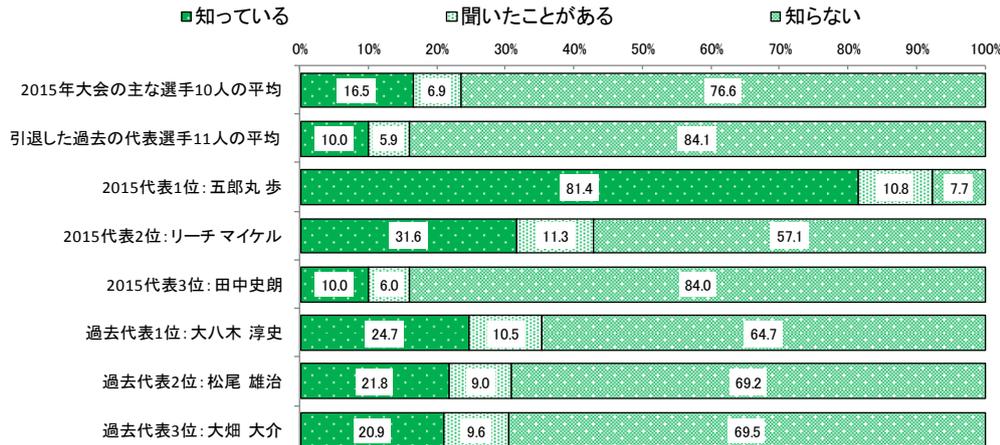


図1: ラグビー日本代表選手の認知率:2015年大会と過去の大会【インターネット調査】(n=3697)

図2は観戦者調査の結果を示している。ラグビーワールドカップ2015の主な日本代表選手の平均認知率は53.8%。上位3選手は「五郎丸歩」97.2%、「リーチマイケル」79.8%、「畠山健介」56.3%。インターネット調査との比較では、「五郎丸歩」の認知率は1.2倍、「リーチマイケル」は2.5倍、「畠山健介」は6.5倍と、分母となるインターネット調査の認知率が低いほど倍率が大きくなる。さらに、過去の主な代表選手の平均認知率は26.2%に上り、インターネット調査の2.6倍。上位3人は「大畑大介」51.8%、「大八木淳史」41.1%、「平尾誠二」40.5%。上位3人の認知率はインターネット調査と異なり、ラグビーワールドカップ2015代表の認知率3位56.3%よりも低い値となった。20代以下では「大八木淳史」と「平尾誠二」の認知率は10%程度であり、スタジアムに足を運ぶ若い世代は過去の代表選手への関心が相対的に低いと判定できる。

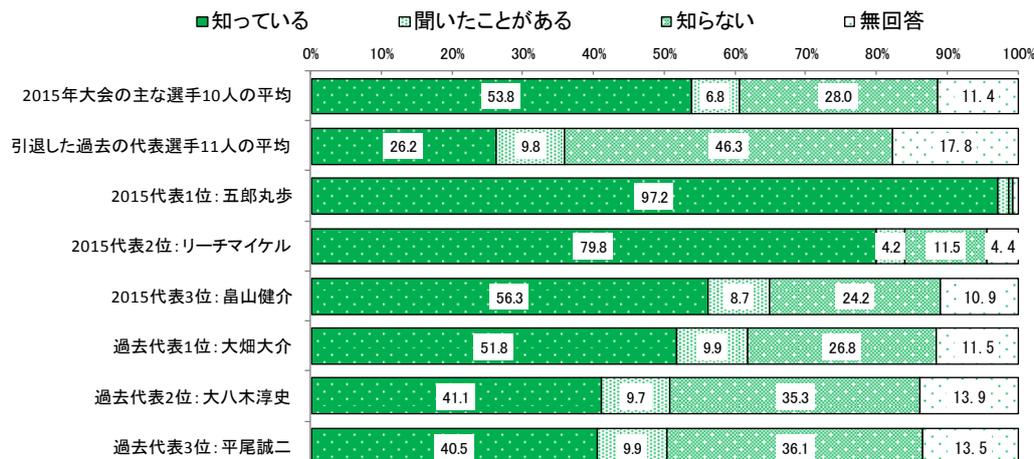


図2: ラグビー日本代表選手の認知率:2015年大会と過去の大会【観戦者調査】(n=496)

## (2) ラグビー関連トピックスの認知状況

近年のラグビー関連トピックスの認知状況についてインターネット調査と観戦者調査の結果を比較した。図 3 はインターネット調査の結果を示している。「2019 年に日本でラグビーワールドカップが開催される」ことを「知っている」と回答した者は 50.4%。スーパーラグビーに関するトピックスでは「ラグビー日本代表の五郎丸歩選手がスーパーラグビーの『レッズ』に加入した」の認知率が 43.6%で、「2016 年から世界最高峰のリーグ『スーパーラグビー』に日本が参加する」の 20.9%を大きく上回った。また、「2016 年リオ五輪の 7 人制ラグビーに、女子日本代表の出場が決定した」が 43.5%、「2016 年リオ五輪から 7 人制ラグビーが正式競技になった」および「2016 年リオ五輪の 7 人制ラグビーに、男子日本代表の出場が決定した」が 41.8%。ほとんどのトピックスで年齢が高くなるにつれて認知率が高くなる傾向にある。

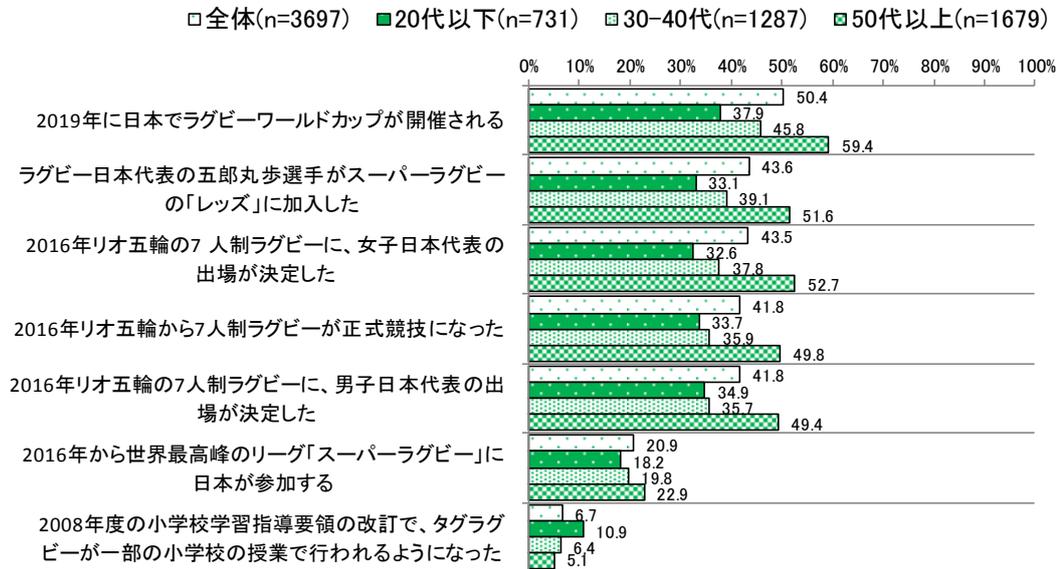


図 3: ラグビー関連トピックスの認知状況【インターネット調査】(年代別)

図 4 は観戦者調査の結果を示している。インターネット調査と同様に、ほとんどのトピックスで年齢が高くなるにつれて認知率が高くなる傾向がみられる。「2008 年度の小学校学習指導要領の改訂で、タグラグビーが一部の小学校の授業で行われるようになった」は 32.7%にとどまり、他のトピックスと比べて低い値であったが、観戦者の認知率はインターネット調査の 5 倍弱と高く、スタジアム観戦者の 3 人に 1 人は、本人もしくは家族、友人が小学校の授業でタグラグビーを経験しているのではないかと解釈できる。

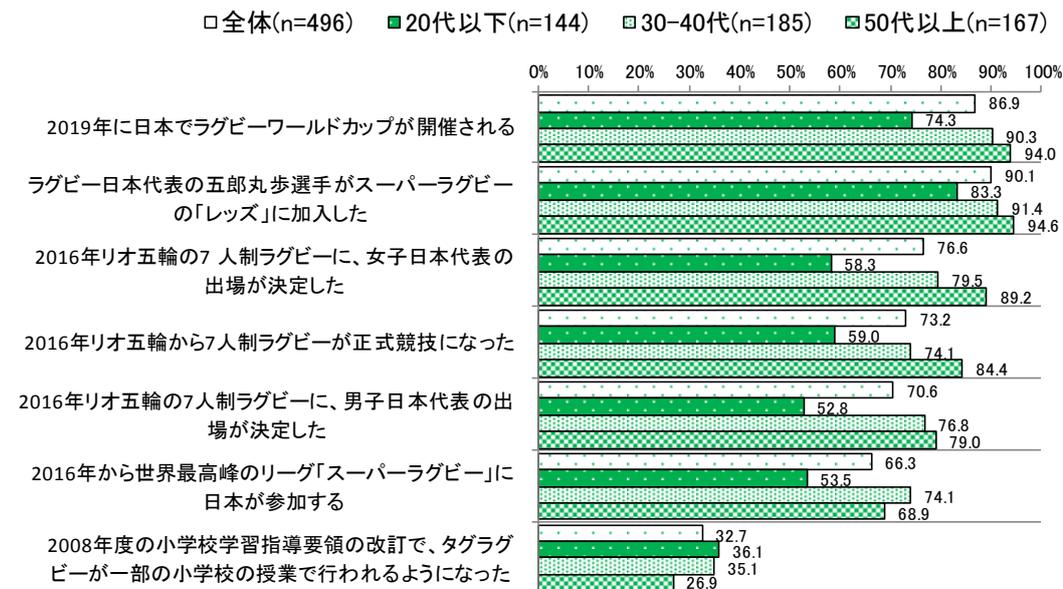


図 4: ラグビー関連トピックスの認知状況【観戦者調査】(年代別)

### (3) 観戦経験別ラグビーワールドカップ 2019 観戦意向

図5は、ラグビーワールドカップ 2015 以前にラグビーの「観戦経験あり」とする者と「観戦経験なし」とする者のグループ別に、それぞれの程度の割合の者がラグビーワールドカップ 2019 日本大会を観戦したいと思っているかを示している。「日本代表の試合を会場で観戦したい」と回答した者の割合は「観戦経験あり」34.9%、「なし」8.5%、「日本代表の試合をテレビやインターネットの動画で観戦したい」では「観戦経験あり」68.4%、「なし」33.9%、「日本代表以外の試合を会場で観戦したい」では「観戦経験あり」16.1%、「なし」1.7%、「日本代表以外の試合をテレビやインターネットの動画で観戦したい」では「観戦経験あり」24.5%、「なし」9.9%、「日本代表以外の試合をテレビやインターネットの動画で観戦したい」では「観戦経験あり」24.5%、「なし」9.9%であった。

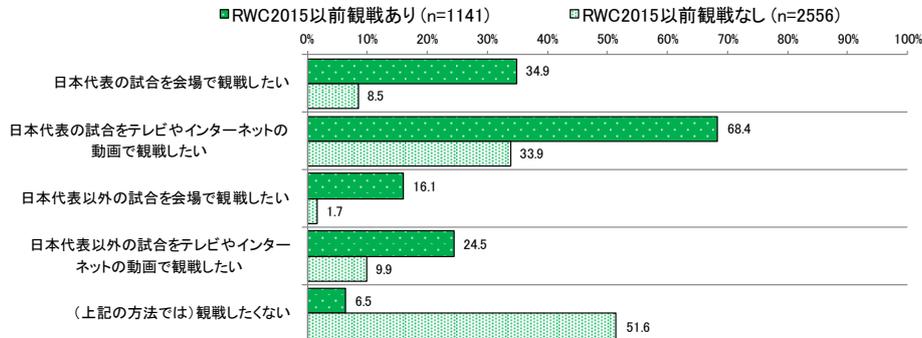


図5: 観戦経験別ラグビーワールドカップ 2019 観戦意向【インターネット調査】

### (4) 観戦経験者の性・年代別特徴

図6はインターネット調査の、図7は観戦者調査の、観戦経験者の割合を性別および年代別に示している。男性の観戦経験者の割合は、両調査ともに概ね年代が上がるにつれて高くなっているが、女性の観戦経験者の割合は、観戦者調査では年代が上がるともに高くなるが、インターネット調査ではそのような傾向は見られない。 ※リリース掲載にあたり、直接比較しやすいよう図を最適化しています。

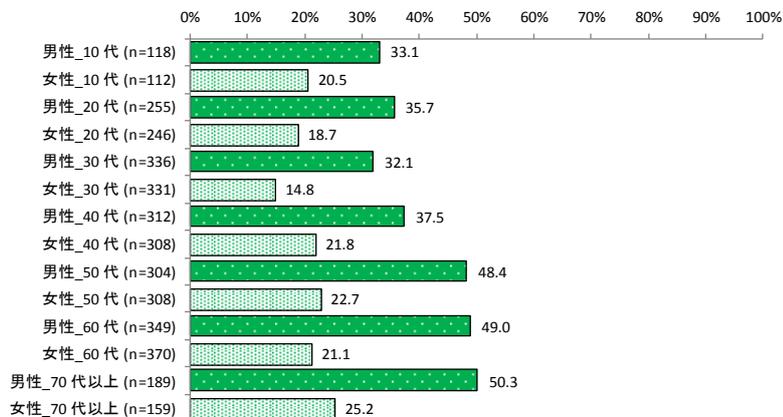


図6: 性・年代別の観戦経験者の割合【インターネット調査】

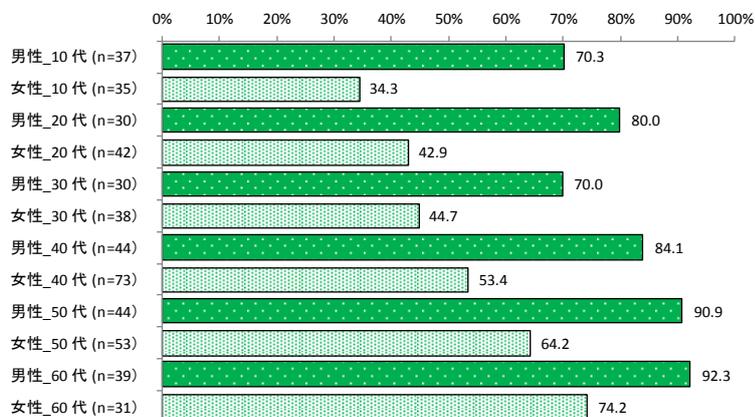


図7: 性・年代別の観戦経験者の割合【観戦者調査】

### (5)ラグビートップチームへの要望

図8は「ラグビートップチームに対して実施を希望すること」について、男女別に観戦者調査の結果を示した(複数回答)。前述のように、観戦経験者の割合は男性の方が女性よりも高い傾向を示しているが、選手やチームとの交流に関しては、女性の方が高い割合で支持していることがわかる。女性の回答が男性よりも高い値を示した実施希望項目を挙げると「選手やチームによる学校や職場訪問(交流会) (男性: 32.1%、女性: 40.8%)」、「選手やチームによる学校や職場でのラグビー体験教室」(男性: 27.2%、女性: 32.0%)、「選手やチームによるルール解説講座」(男性: 30.8%、女性: 39.7%)、「選手やチームによる地域の体育イベント(市民運動会など)への参加」(男性: 21.9%、女性: 22.4%)となる。

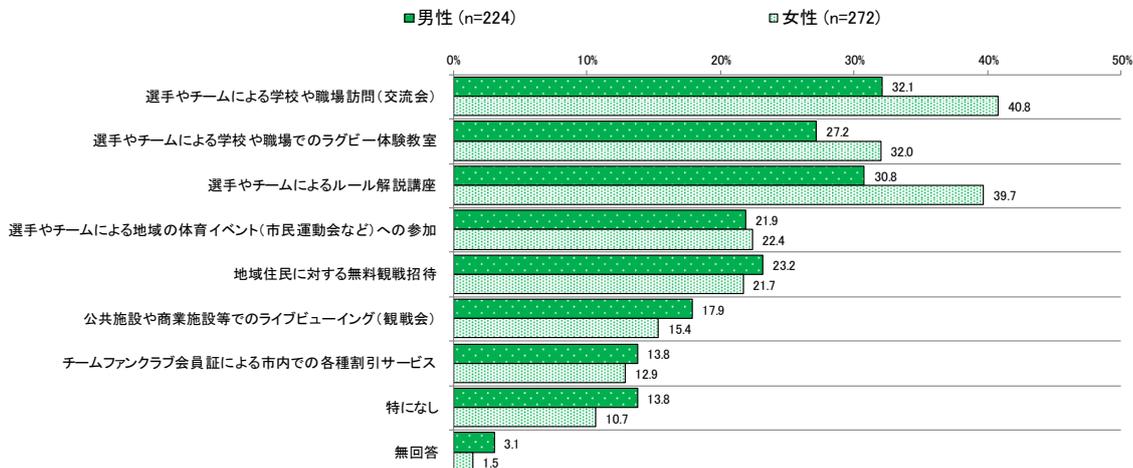


図8: ラグビートップチームに対して実施を希望すること【観戦者調査】(男女別)

図9は「ラグビートップチームに対して実施を希望すること」について、年代別に示した。年代が若い世代に支持されている(年齢が上がるに従って割合が下がる傾向)実施希望項目は「選手やチームによる学校や職場訪問」(20代以下: 45.1%、30-40代: 38.4%、50代以上: 28.1%)、「選手やチームによる学校や職場でのラグビー体験教室」(20代以下: 36.1%、30-40代: 34.6%、50代以上: 19.2%)、「地域住民に対する無料観戦招待」(20代以下: 29.2%、30-40代: 20.5%、50代以上: 18.6%)となっている。逆に、年代が高いグループに支持されている(年齢が上がるに従って割合が上がる傾向)実施希望項目は「選手やチームによるルール解説講座」(20代以下: 25.7%、30-40代: 37.3%、50代以上: 42.5%)、「公共施設や商業施設等でのライブビューイング」(20代以下: 13.9%、30-40代: 14.6%、50代以上: 21.0%)、「チームファンクラブ会員証による市内での各種割引サービス」(20代以下: 10.4%、30-40代: 13.5%、50代以上: 15.6%)であった。

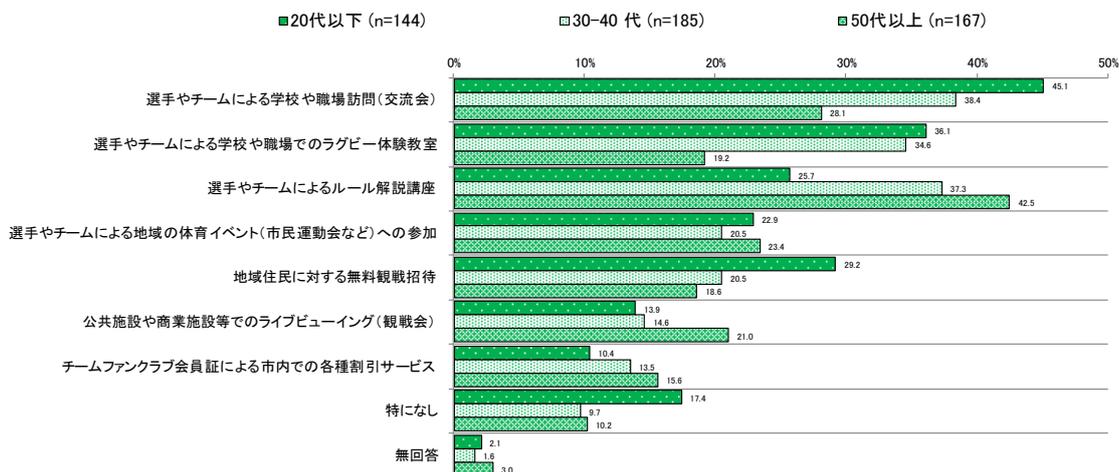


図9: ラグビートップチームに対して実施を希望すること【観戦者調査】(年代別)

その他、詳細につきましては、当財団ウェブサイト(<http://www.ymfs.jp/project/culture/survey/007>)をご覧ください。